

第1話 中之島新線の開通とお米屋さんとは深〜い関係がある

京阪電鉄は天満橋駅から中之島の大阪国際会議場(中之島駅)を結ぶ新線「中之島線 2・9 キロ」を今秋の10月19日に開業します。

明治43年に京都五条駅まで開通したときの大阪の起点は天満橋駅で、昭和38年に淀屋橋駅まで延長されましたが、その天満橋からホットポイントの中之島駅までつながったことで京都・出町柳までで65分でむすびます。

この中之島は淀から下る大川(昔の淀川)が天神橋のところから左(南側)が土佐堀川、右は堂島川と二手にわかれる三角州で、もともと葦が生い茂った砂地でしたが、元和5年(1619)に大地によみがえらせたのがお米屋さんで、最初の町人蔵元の豪商「淀屋」なのです。つまり元からおコメとは縁が深いのです。

南北は広いところでも3百^祀、東西3キロと細長く、江戸時代は難波橋が東の鼻(尖端)でしたが、明治の淀川大改修で上流の天神橋まで土砂を埋めてそこが大阪初の公園となったのです。いまでも先端を「山崎の鼻」と呼ぶのはその昔、備中成羽藩山崎家の蔵屋敷が島の先端に建てられていたなごりです。

蔵屋敷って聞き慣れないでしょ。侍の時代に地方の各藩はコメを保管する倉庫として商都大坂に競って建てていました。少しでも高く売るためですが、大名家のものだけで天保6年(1835)には111、貴族や寺社を含めて135もあって、そのうち広島藩3700坪などのコメ蔵が中之島の端から端まで^{いらか}疊を並べていました。

中之島公園からバラの小径をぬけると、赤煉瓦づくりの中之島公会堂が威容をあらわしますが、ここは上野館林や浜田藩などの蔵屋敷跡で、悲運の相場師岩本栄之助が寄贈した資金で大正7年(1918)に完成しています。

その西隣は神殿風ネオ・バロック様式の府立中之島図書館(仙台藩)で、かつての安宅コレクションを集めた堂島川岸の東洋陶磁美術館(成羽藩)とともに浪速ではめずらしい＜＞文化ゾーンを形成しています。

御堂筋を挟んだ大阪市役所(赤穂藩)と日銀大阪支店(島原藩)、四ツ橋筋の大阪フェスティバルホール(平戸藩)と朝日新聞社(宇和島藩)、三井ビル(黒田藩)、国際美術館(今治藩)、リーガロイヤル(高松藩)、大阪国際会議場(杵築藩)と、まゝキリがありません。

第2話 中之島を造成し大阪を創ったのは常^{じょうあん}安^{こあん}と个庵の親子だって知ってました？

淀屋の名前は御堂筋の「淀屋橋」となにな筋の「常安橋(淀屋初代の名)」でしか残っていませんが、淀屋の屋敷というのは淀屋橋南詰、現代の地下鉄と京阪電車の「淀屋橋駅」のところにあって、北浜の表玄関は間口百間 180 メートル、東は心斎橋筋から西は肥後橋まで合計2万坪もの広さがあったといわれています。屋敷内には「いろは蔵」と呼ばれた 48 の米蔵、衣装倉など 730 棟もの建物が並ぶ前代未聞の日本一の町人屋敷だったそうです。

同じ時代に、荒海乗り切って紀州のみかんを江戸にとどけて大金持ちとなったという紀伊国屋文左衛門や、日光東照宮の入札でぼろ儲けした奈良屋茂左衛門がいますが淀屋からみれば小僧っ子。三井や鴻池も足元にも及ばない豪商でしたが五代目で財産没収、闕所・所払いになって歴史から消えてしまうのです。

淀屋の出身は山城の国・城州淀、現代の京都府八幡市西北の淀の付近で、初代の淀屋岡本与三郎常^{じょうあん}安は秀吉が伏見城の造営をはじめたとき工事を請け負い、さらに文禄四年、淀川が台風で氾濫したとき特に難工事とされた枚方から橋本までを完成させたことで、秀吉から「商いすべて勝手たるべし」とのお墨付きと、加賀百万石のコメ 10 万石を取り扱う代理店になって大坂北浜十三人町に進出したのです。

太閤秀吉が没して大坂冬、夏の陣では東方につきます。天王寺の茶臼山に家康の本陣小屋を献上した功績から、京都八幡に三百石の田地山林の永代所領安堵と石清水八幡宮の侍格。さらにコメの相場をたてて価格の標準をはかりたいと願い出て許されています。

夏の陣で廃墟同然になった町は、家康の孫にあたる「松平忠明」が大坂城主になって三の丸を市街地して京都伏見の商人を呼び入れ、多くの堀川をつくり、八百八橋という水の都を整備していきます。淀屋は砂地の中州にすぎなかった中之島の開発を常安請地として完成。褒美に二町歩の常安町(中之島四丁目)を賜り、そこへ架かるなにわ筋の橋が「常安橋」です。

常安の跡を継いだのが長子の三郎右衛門言^{げんとう}当で通称个庵^{こあん}。彼こそが常安とともに大阪を天下の台所に創り上げた人物といわれる傑物で、京橋の淀屋邸あった青物市を天満に移して「天満青物市場」を創設し、靱^{うつぼ}を開拓して「雑喉場魚市^{ざごぼ}」を創り、「淀屋米市」を一層隆盛させて浪速三大市場をつくります。さらに糸割符を大坂に認めさせて莫大な利益を呼び込み、海部堀町、新天満町も開発して大坂の西部地域を拡げていく、それが親子二代で大坂を創ったといわれるゆえんです。

第3話 江戸時代の経済は「コメ遣い経済」「コメ本位制」、給与もおコメでした

江戸時代の経済はコメ遣い経済、コメ本位制といわれました。大名の収入も加賀百万石などと領内で採れる米の数量で表し、家臣の武士も何人扶持といった扶持米（俸祿）や、支配をまかされた領地からの入る知行米という、基本的にはおコメで給与をもらっていました。

おコメは縄文時代の終わりころに日本に入ってきて、平安時代にはすでに現代と同じような食べ方をしていたのですが、全国に流通する換金商品として経済の中心となった点で江戸時代というのは画期的な時代でした。

そうだった理由は色々ですが、戦国時代に城壁の構築や敵城の水攻めといった土木技術が発展して、それまでの山間部における小規模農業から、大河川の下流に位置する平野部で大規模な稲作が実現したことが最大の理由です。稲作の耕地面積は2百万町から3百万町歩へと増大し、インディカ米から大量生産にむいた現在のジャポニカ米に品質が変わってきたことも商品化を加速しました。

江戸時代の生産量は2千7百万石ぐらいで、消費人口は鎌倉時代の680万人から戦国時代には現代の1割ほどの1千200万人。ドンパチから平和な時代になると人間やることは同じらしく、江戸時代は3千100万人～3千300万人に急増して幕末に至ります。

人口を士農工商にわけると武士が6%、工商のいわゆる町人が9%、残りの85%が農民でした。どのぐらい食べていたかという、武士や商売人たち都市生活者は年間一人当たり1.2石、180kgを食べ、農民は0.7石、105kgしか食べられない。現代は食べるものの種類や量が増えて米飯食は60kgまで減っていて、バイオ・エタノール化で不足する小麦やトウモロコシと比べても高価なため消費は増えないでいます。これを米離れと言いますが、それでも戦前までは一人1石150kg、東京オリンピック当時でも130kg近くは食べていましたから、都市生活者の180kgは副食の少ない江戸時代では決して多い量とはいえません。

大名は米納の年貢のうち自己消費分と家臣団への給与分を除いて残りを販売し藩財政にあてていました。寛永期(1640年頃)までは城下町で売っていましたが、多くのコメをより高く売るために大量一括売却が可能な大市場への廻米がはじまります。その量は、武士や農民の余剰米を含めて合計で約500万石から600万石が出廻わり、そのうち100万石が江戸に流入していました。でも江戸の人口は100万人以上で一人1.2石なのでとても足りませんよね。なぜかそんなことになったのか、江戸の人たちはどう対処したのでしょうか？

第4話 100万人都市江戸の50%は武士。浪速は35万人で武士はちよっぴり

大江戸八百八町って有名ですね。「八」というのは末広がりというゲンかつぎだけでなく、旗本八万騎とか八百八橋、八百萬の神^{やおよろず}といったようにと数が多いという意味で使われますが、ピッタリ808町だったのは万治年間(1658)で、1700年代には900町、1800年代半ばに1700町へと倍増します。

1町は道路で囲まれた1区画60間(180m)四方が基本で、家康が考えた都市計画でした。人口はロンドンやパリとならぶ世界的大都市として100万人を超えていて、うち半分の50万人が武士階級という政治と官僚の町(いまでも……)で、大名屋敷が全体の35%、旗本御家人などの武家屋敷25%、残りの4割に町人……と思うのは甘い。寺社仏閣が20%を占めていて、余りわずかの狭い長屋に50万人の町人が押し込められていました。

いずれにしろ都市生活者ですから一人年間1.2石を食べるとして120万石以上は必要なのですが、直接流入(廻米)したのは100万石ですから満足に腹いっぱいにはならない。

もう一方の大坂ですが人口は35万人。瞬間タッチで42万人という記録がありますが、武士はちよっぴりしかいません。目ぼしいところで大坂城の200人、東西の奉行所にそれぞれ与力30に同心60人の合計180人ほど。中之島などの111の各藩蔵屋敷には数人の留守居役しかいませんから、家族や単身赴任者、観光客を含めてもせいぜい4~5千人程度がいいところ。まさに町人文化の街です。

これが反権力の源になるのですが、いずれにしろ流入量は150~200万石もあって、100~150万石もが余剰米となって全国に通用する換金商品、金融商品となって浪速から江戸など各地に販売されていったのです。

じゃあ、不足している江戸ではなぜ大坂だったのか。理由を3つほどあげてみます。昔から近畿畿内には高度な生産技術をもつ手工業や商業が発達していて、おコメは各地から仕入れる地方稲作との分業が進んでいたこと。二番目は、コメを流通させる市場が秀吉が城下に集めた商人たちの伝統と活躍で著しく発達して、ビジネス的発想が根付いていたこと。目の前に米俵が山積みになると江戸では必ず暴落するが、大坂は産地在庫や来年の豊凶などを見通して合理的な値段がついたのです。

三番目は運送方法で、運搬機能がないところに流通はありません。大坂への瀬戸内航路は早くから発達していて、当時の米の主産地だった九州や中四国から廻米体制が確立していましたし、寛文12年(1672)には幕府の命で河村瑞賢^{ずいけん}さんが西廻り航路も整備しています。ここが面白いポイントなので、来週も楽しみに。

第5話 西廻り航路の整備で大名たちは蔵屋敷を大坂に競って建てていました

100万都市お江戸ではなく、35万人の大坂にコメや特産品が大量に持ち込まれたのは河村瑞賢^{ずいけん}の流通革命が影響しました。

瑞賢という人は元和4年(1618)2月に、現在の三重県南島町東宮の貧農に生まれ、13歳のときに江戸に出て人夫などをして苦勞のすえに身を起こし土木請負業を始めます。明暦の振袖火事(1657)ではいち早く木曾の山林を買い占めて、大きな利益を得たのを機会に、諸大名から治水などの仕事を数多く請負う総合ゼネコンとして名が知られるようになったのです。そして寛文12年(1672)に西廻り航路を整備するように幕府に命じられました。

後に旗本にまで出世する成果をあげますが、このルートは大坂から瀬戸内海、関門海峡を経て、北陸・東北などの日本海側の諸港とを結ぶもので、後には北海道にまで延長されて蝦夷地と大坂とを結ぶ「北前船^{きたまえぶね}」、大坂と江戸を結ぶ「菱垣廻船^{ひがきかいせん}」「樽廻船^{たるかいせん}」が花形になりました。

コース的には大変な長距離で、山形県酒田から大坂まで1ヵ月以上もかかったのですが、実は、それまではもっと短距離で運んでいたのです。まず東北・北陸からコメや産物を日本海に運びだし、若狭国の小浜や敦賀で一旦陸揚げし、そこから馬の背に積み替えて琵琶湖北岸の海津まで陸送。さらに琵琶湖を舟で大津まで運び、大津から京都までは馬、さらに伏見から船で淀川を下って大阪まで届けていたのです。

この方が下関経由よりも距離でも時間的にも短いのですが大きな問題がありました。積み替え回数が多くて、弱い俵の包装では荷崩れの損失が膨大だったからです。2割も3割も減ってしまうから笑ってはずまされません。時間がかかっても西廻り航路の方が積み替えがないだけ便利で損が少ないというわけです。

大坂の安治川口に着くと、淀川は水深が浅いために船頭1人乗りの10石積み茶舟や、2人の20石積み上荷舟といったはしけに積み替えて上流の中之島などの蔵屋敷に運んでいました。蔵の数は最盛期の天保年間には大名の111のほか、貴族や寺社、幕閣の諸侯までもが建てましたから135を数えるほどでしたが、この蔵屋敷というのがただの倉庫とは大違い。デカイのは広島藩の3千7000坪で(旧阪大医学部跡・現国立国際美術館)、裁判所のところにあった佐賀藩も3千坪を越える広さがあって、内部には参勤交代の途中でお殿さまが寝泊まりできる御殿やお供の侍の長屋もある各藩の大坂出先機関の役割もはたしていました。ところで、大坂の蔵屋敷のなかである有名人が生れています。誰かって？ 次回のお楽しみということで。

第6話 天は人の上に…の福沢諭吉さんは大坂のコメ蔵で産声をあげたって？

広島藩の蔵屋敷は大きくて、3 千 700 坪もありましたから、なにわの海の時空館（大阪市住之江区）でも大阪歴史博物館（大阪市中央区）にもジオラマが展示されていますが、残念ながら現存する蔵屋敷はありません。ただ筑前黒田藩の蔵屋敷「門」が天王寺市立美術館に移築されていて、その面影を偲ぶことができます。もともと中之島にあったのですが、三井ビルの建築にあたってここに寄贈されたものです。

大坂港に着いた千石船のことを弁才船べんさいせんと呼んで、北前船や大坂と江戸を結ぶ「菱垣廻船ひがきかいせん」、「樽廻船たるかいせん」などを総称しますが、淀川上流の蔵屋敷までは 10 石（1.5 トン）積みの茶舟や 20 石（3 トン）積みの上荷舟などのはしけに積みかえて運びました。大きな蔵屋敷には荷を満載したまま出入りできる「御舟入りおふないり」という施設まで整った、現代でいうトラックターミナルつきの倉庫でした。屋敷内には各地の神様も祭ってあって、土佐藩の土佐稻荷神社など現代も浪速の祭りとして溶けこんでいます。

各藩の販売出先機関とはいうものの、屋敷は藩の所有不動産ではありませんでした。大名は地元と江戸にしか屋敷をもてない定めでしたから、伊勢の藤堂家、伊予の久松家などの例外を除いて町人の家や屋敷を借りて使いました。その家主（名義人）を名代なだいと呼び、蔵の名前が時代で変わったりするのもそのせいです。

蔵屋敷は中之島以外にも水運のよいところに建てられていましたが、玉江橋を北にわたった「ほたるまち」（福島区）の、朝日放送（ABC）のビルが豊後中津藩の蔵屋敷でした。天

保 5 年（1843）12 月 12 日、ここで「福沢諭吉」が下級藩士福澤百助の末っ子として生れています。父の死後は中津に帰り、安政元年（1854）19 歳で長崎に遊学して蘭学を学び、安政 2 年からは緒方洪庵の適塾（中央区北浜）に入塾、認められて塾頭にもなっています。

維新後の慶応 4 年（1871）には慶應義塾を創設して教育活動に専念していて、蔵屋敷跡には「天は人の上に人をつくらず……」の碑が刻まれています。大坂のコメ蔵で産湯につかり、北浜の適塾の塾頭ですから、現代なら間違いなく阪神タイガース・ファンでしょうね。

慶應義塾編纂「福沢諭吉全集第 11 巻」のなかに「相場会所は一国の殖産商売のために無害無益のものか、（中略）我が輩は断じて有益無害なりと答える者なり」と先物取引有用論を展開しています。ここでいう相場会所というのは米穀相場会所のことであり、明治政府が先物取引はバクチだからと禁止し、財政に影響がでたため急いで再開するなど、ドタバタ混乱するのをあざ笑っていました。コメ蔵生まれの浪速育ちというのが影響しているのかも知れません。

第7話 八百八橋、水の都の中之島に架かる橋はおコメつながりがいっぱい

水の都大阪は、ウォーター・フロント構想が話題になっていますが、江戸時代は「浪速の八百八橋」として知られていました。ウソの三・八といいますが、大坂三郷といって都心部はいまよりも狭く、元禄14年の記録では136橋、多いときでも160橋ぐらいだったようです。

そのうち幕府が架けた公儀橋はたったの12橋で、あとは町橋だというのが浪速っ子の自慢でした。

当時1番長かった橋は天神橋、次に長

いのが難波橋で3番目は天満橋。これを浪華三

大橋といって公儀橋です。戦略上重要な街道の橋も公儀で架けました。大坂城から京都にのぼる京橋、備前島橋と野田橋、それに大坂城内の^{しぎの}嶋野橋の四つ。大坂城の正面(西)の元は外堀だった東横堀川には高麗橋。これは朝鮮の使節を迎える迎賓館があったなど諸説があり、船場に通じる本町橋と農人橋も公儀橋。残る二つは紀州街道の要所で、長堀川の長堀橋と道頓堀入口の^{につぼん}日本橋で計12橋ということになります。

町橋には架けた商人の名が多く、心齋橋は伏見出身の美濃屋岡田心齋さんが架けたもの。末吉橋はルソンなど南蛮貿易で大金持ちになった末吉孫左衛門。道頓堀の太左衛門橋は、歌舞伎を上演していた角芝居(角座)の主人、大坂屋太左衛門さんの名です。「四つ橋」というのは橋の名ではありません。長堀と西横堀の二つの川が交差するところに『ロ』に橋が架かっていて、北側の上繫橋、南の下繫橋、東側は炭屋橋で西は吉野橋の総称で、ぐるりと一周できることから納涼やお月見の名所でした。

色っぽい橋もあります。道頓堀の相合橋は、本当はアイアウ橋ですが、道頓堀の芝居町と川をはさんだ宗右衛門町のお茶屋町とを取りもつ橋で、小粋に「あいあい橋」と呼びます。ひっかけ橋(えびす橋)の近所ですから若いアベックが手をつないでルンルンですが、どういうわけか地元では縁を切りたいときに渡る『縁切り橋』と呼ばれ、芸者は嫌がって渡りませんし、婚礼の行列などは絶対に避けたものです。

おコメの町の中之島には、米屋さんの淀屋橋と常安橋がありますが、肥後橋は橋のところに肥後熊本藩の蔵屋敷があったからですし、越中橋は細川越中守の蔵屋敷があったから。肥後橋の一つ川下の筑前橋は、蔵屋敷関係者だけの専用として筑前黒田藩が架けたものでしたが、例外がありました。ここの石段は砥石でできていて、近所のおかみさんだけは包丁を持ち込んで研ぐことを許されていたのです。川岸の階段にずらりと並んで、着物の裾をからげてゴシゴシ研ぐのですからお色気たっぷり。隠れた浪速名物だったことは言うまでもありません。

第8話 蔵屋敷のコメの管理販売、入出金から送金まですべて丸投げだった

蔵屋敷のコメは国元から「蔵役人」や「大坂御役」を派遣して売り捌かせていましたが、しょせんは武士の商法でうまくいくはずはありません。そこで払米は米商人を町人蔵元（最初の町人蔵元は淀屋だそうです）に任命し、代金の収納や送金は現代の銀行にあたる両替商を掛屋として任命し、これらを管理監督する数名の武士を留守居役として赴任させていました。福沢諭吉さんは中津藩の留守居役の子ども（第6話参照）として産まれたわけです。

実際の販売は指名入札制で、各藩が許した複数の問屋たちが応札します。入札日は搬入時期によりますが、西国米は秋で、北国米は海荒れの冬をさけ、関門海峡をわたり瀬戸内を通ってきますから春に行っていました。無事に落札すると三分の一の手付け金（敷銀）を掛屋に支払い米手形（銀切手）を受けとります。

基本的には30日以内にこの米手形に残金をそえて町人蔵元に届けると米切手（倉荷証券）に換えてくれ、この証券を蔵屋敷に持参すると券面に書かれた石高の米が受け取れます。

はじめのころは米切手と交換に蔵屋敷から実物米を引き出して市中で売買していましたが、米俵が重く壊れやすく嵩張るために切手のままで取引するほうが便利なのに気づきました。三分の一の敷銀で買える米手形ならコストが安いために投機やヘッジ（掛け繋ぎ）のツールにも便利でいい。

米を売る人や買う人が集まり取引をはじめると自然に市の開設が求められますが、日本一の豪商淀屋の初代常安は、徳川家康に「米の値段の標準をたてたい」と願い出て朱印状を得ていましたから、蔵屋敷に近い北浜の広大な屋敷の表通りに米商人たちが集まり、日常的に取引をはじめ、いつしか「淀屋米市」と呼ばれるようになっていったのです。

淀屋米市を利用する者は千人を超えたといえます。なにしろ蔵屋敷の入札に参加できない中小の米屋でも米手形や米切手を買えば仕入れができますし、米切手なら1年から最長1年半も引き出すことが猶予されていたからコメを保存する倉庫も必要がない。これなら安いときに大量に買っておいでも邪魔にはなりません。資産の運用先として銀行も郵貯銀行も投資信託も株式もない時代ですから、富裕層は投資の対象に米切手を買って求めました。

江戸時代中期以降は、米切手の不渡りがおきないように幕府が保証しましたから、買いたい者や売りたい者が淀屋米市に多く集まって、証券のまま「転々売買」されていました。大量の取引で収斂された米価は公正な基準価格として米飛脚や旗振り通信により全国津々浦々まで伝わっていくことになったのです。

第9話 江戸で威張り散らしていた札差^{ふださし}が、大坂にはいなかったワケ

100万都市の江戸の町には120万石を超えるおコメの消費がありましたから、流通システムも大坂とは異なっていました。

幕府米の集積地は隅田川河口や埋立地の周辺で、当初は北の丸、代官町、和田倉、竹橋の蔵でしたが、元和6年(1620)に2万7千9百坪、54棟270戸というでっかい米蔵を浅草の隅田川沿いに建てて保管するようになります。その名残として今でもここを蔵前通りといいます、相撲取りとは無関係です。

江戸城下に住む旗本八万騎は、地方知行^{じかたちぎょう}と蔵米^{くらまいとり}取に分かれていて、知行取りは一定の領地を与えられてそこからの年貢が収入です。毎年一定量の米で給料をもらう者を、その量から切米^{きりまい}何十俵とか何人扶持^{ふち}とよび、切米は1年分の俸祿のことで、扶持米は1人扶持だと1日5合(902立方センチ)の割合ということです。

蔵米の支給は春に四分の一、夏に四分の一、残りの四分の二を冬に浅草の米蔵から受け取って、自家消費以外は売って生活にあてます。ただ、受け取ろうにも遠方だったり、受取り期限が定められていましたので、そのうちに面倒な手続きは米商人を代理人にして受領させ、そのまま販売まで委託するようになります。これをビジネスにしたのが「札差」なのです。

名の由来は、武士から預った米札を竹串にはさんで御蔵役所の入り口にある藁束^{わらたば}に差し込んで蔵出しの順番を待ったからだとか、預った米に旗本の誰々さま所有という札を米俵に差したからなどと諸説があります。代行手続の代金を「札差料」といって百俵につき金1分、米問屋への売却には金2分を受け取りましたが、運搬経費は札差の負担で金2分もかかったといいますから、まあ儲けなんて無縁です。

大坂にはもともと旗本御家人は数えるほどでしたから札差なんていませんが、その儲からないはずの札差が江戸の富豪の代表にまで変貌していったのは別の理由がありました。彼らは依頼をうけた旗本に販売代金を届けていましたが、武士の生活が不況などで困窮してくると、次の蔵米を担保にした前借りを申しでるようになったのです。相手は幕府家臣という信用の高い優良貸つけ先で、しかも年1割5分という表金利に裏金利まで取って2割から3割というサラ金以上の暴利をむさぼったのですから、金貸しの儲けがウハウハだったのです。

江戸の「十^{じゅう}八^{はち}大通^{だいとう}」と呼ばれる富裕町人に成り上がり、金を湯水のように使い、義侠心と情けと通人ぶった派手な男伊達^{おとこだて}が庶民の喝采を浴びましたが、反面、ねたむ者も多く「悪徳商人」の代表にもなり下がったわけです。

第10話 江戸の町と大坂とが異っていたおコメ流通事情の本当のヒミツ？

幕府は江戸の正規の札差として享保9年(1724)に109人を公認しています。零細な米屋を除くと江戸の米問屋は4百人ほどいたといわれ、札差のほかにも高間伝兵衛など幕府御用達米商人が江戸の幕府米の運送や備蓄、払い米などのすべてを扱っていました。

江戸に流入するおコメは幕府米だけとは限りません。藩米と呼ばれた諸公廻米や商人米(納屋米)があつて、量は藩米よりも商人米が多く、幕末の文久2年(1862)の記録では幕府米23%、藩米25%に対して商人米は52%にものぼりました。そのうち関東や奥州米は地回り米と呼ばれて「地回り米穀問屋」「関東米穀三組問屋」が取り扱い、大坂から運ばれてくる上方米は「下り米問屋」が取り扱います。

さらに、補助的な役割として「河岸八町米仲買」「脇店ハカ所米屋」などが組織されていましたが、いずれも幕府の指導で価格協定を結ばされていて、おコメを取引する自由市場という発想などまったくありませんでした。

玄米のまま問屋から駄売屋^{だうりや}におろされ、そこから搗米屋^{つきこめや}と呼ばれる精米業者が白米にして消費者に届けていましたが、江戸では最終消費者の米価までも仕入価格の2割増などと幕府が定め、商人が自由には決められません。ここが大坂と根本的に違うところで、将軍の下に旗本八万騎というご直参がいて、家康は江戸をひらいたとき、武士の生活を維持するために各地から町人を呼び集めたのです。つまり江戸町人は武士に奉仕するために存在し、幕府権力と直接結びついていないと商売になりません。

米価を幕府が決めたい気持もわからないではないのです。なにしろ江戸人口のうち半分はおコメで給料をもらう武士ですから、米価の上下は給料の増減とイコールで、へたに動くと幕府の屋台骨が危うい。米本位制の封建社会では米価を定めるのも政治をつかさどる者の役割だと決めてかかり、豊作や凶作、生産や消費などおかまいなしに値段を押しつけました。

江戸も大坂も幕府直轄の天領でしたが浪速には旗本御家人にサービスするという意識なんてさらさらありません。現代の大豆やガソリンやトウモロコシのように米価は需給で変動してあたりまえ、怒りまくる権力には「ぬらりくらり」と切りぬけ、「お奉行の名さへも知らず年暮れぬ(小西来山)」といったぐあいに、摩擦をおこさぬよう無視するのを良策としました。あげくに幕府が建てた家康をまつる豪華絢爛の川崎東照宮よりも、秀吉の豊国廟をこっそりと信仰していたりするのです。